

コラム Column

市場政策および農業政策における 変動について

ワイアット・トンプソン* / (訳) 合田素行

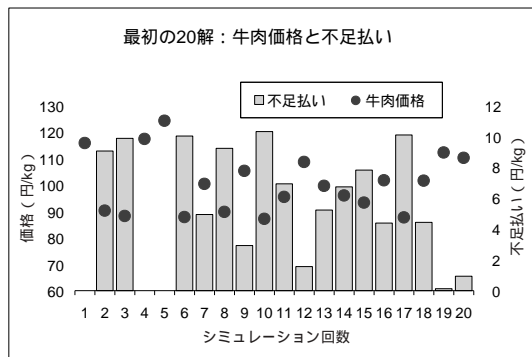
政策の評価という作業は、通常ある基準となる出発点を設定して行われる。たとえば、「基準年」という言葉で比較が行われるのはそのことを意味している。これに対し、分析作業の場合は、「平均気温」とか「安定的なマクロ経済状況」といったことを仮定することが多い。このような出発点は分析についてももっと使う必要があるかもしれないが、いつもそれが役立つということにはならない。というのは、低収量とか景気後退期といった極端な場合の数値を想定せざるを得ないからである。

私の政策研究所における研究の主な目的は、市場に対する政策効果を分析する枠組みを、「ストカスティック（確率論的）」モデルを使って構築する、というものだった。この作業は、まず通常の計量経済モデルから始める。つまり、需要と供給は、世界市場での貿易バランスを加味した国内価格で決まる。次のステップでは、外生変数をいくつか選んで、ランダムな数値の割当てを行う。次に、収量の変動として、「平均気温」をランダムに分散する数値と入れ替え、マクロ経済変数として、「安定的なマクロ経済状況」を分散数値と入れ替える。収量の変動やマクロ経済状況の変動の数多くの場合を考え、それに対するランダムな場合の結果の数値を求めることができ、そのつどモデルを解くことになる。最終的な目的は、基準年や平均気温の仮定の時だけでなく数多くのモデル解を得ることにあ

る。

このような作業が政策評価に役立つことを例で示してみよう。ある国が牛肉生産者を保護するとしよう。輸入関税があると、国内価格は世界価格より高くなる。もし不足払い制度があるとすると、生産者は国内価格が一定水準以下に下落する場合に直接支払いを受けられる。価格が低いときはその額は大きく、価格が高いときは不足払いはない。

この例では関税がもし半分になると、国内価格は低下し、不足払い額は大きくなる。しかしこれには、牛肉の世界価格や為替レートといった他の多くの要因が影響してくる。一例として、価格と支払いの一定の組み合わせのもとでの2008年の推計値を図に示した。価格が高く、不足払いはない、という解もいくつか出た。その場合、関税の変化は不足払い額を変化させるが、通常は農家の所得は変化しない。



私としては、JSPS(日本学術振興会)のフェロシップをいただいたことで、幅広い分析を行うことができたと思っている。それぞれの変数に単一の値を与えるのではなく、その代わりに、起こりうる様々な場合の値を与えるわけである。このような作業が、政策の違いが自国や他国の市場にどのような影響を及ぼすかを理解する一助となることを希望している。

注：* 外国人特別研究員（2002.7.1～2003.12.31）
本務：Organization for Economic Co-operation and Development(OECD)